

## 研究結果

小川尚義（1869－1947）は愛媛松山の出身で、その一生を台湾諸言語の研究に捧げた言語学者です。1893年に第一高等中学校を卒業後、帝国大学文科大学博言学科（1890年から言語学科に改称）に入学しました。1896年7月に帝大を卒業した直後、同大学の恩師―上田万年の紹介で渡台しました。渡台後の小川は台湾語辞書の編纂のみならず、台湾高砂族諸語の言語採集や研究も行いました。元台湾総督・上山満之進の寄付金により、浅井恵倫とともに完成した大作『原語による台湾高砂族伝説集』（1935）は1936年に恩賜賞に輝きました。

本研究が注目しているのは、小川尚義らの台湾諸言語の調査・採集が日本内地の中央学界とどのような接点を持ち、そしてそこからどのような影響を受けていたか、ということです。調査期間中、一橋大学大学院言語社会研究科の客員研究員として来日し、小川の故里―松山をも訪問しました。調査は主に①小川尚義に関する未発掘の資料、②上田万年を中心とする近現代日本言語学者（金田一京助、伊波普猷など）、③柳田国男又は東條操の「方言」調査、④高砂族諸言語研究に関わる人類学者たち（伊能嘉矩、鳥居竜蔵、馬淵東一など）、⑤高砂族研究の資金を提供した上山満之進の生涯、の五点に焦点を当てていました。その間、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所の三尾裕子先生、一橋大学大学院言語社会研究科の松永正義先生、安田敏朗先生からご協力をいただき、ここで感謝の意を表します。

言語学者・国語学者上田万年の弟子達の中で、橋本進吉が国語学、伊波普猷が琉球語研究、小倉進平が朝鮮語研究、金田一京助がアイヌ語研究の大家として後に名を成すことは比較的知られています。彼等の研究は高く評価されている一方、近年、上田の「日本帝国大学言語学」の構想による影響で言語調査が行われていたという批判の声も現れています。

小川も、帝国大学文科大学博言学科時代に上田万年に師事していたため、従来、上田万年との共通点が注目されてきました。しかし、本研究の調査により、小川は上田万年の構想した「日本帝国大学言語学」の射程からあっさりとはずれていったことが分かります。また、柳田国男の「一国民俗学」との間にも大きな隔たりがあります。小川は、帝国大学在学中、上田万年より、むしろお雇い外国人教師フローレンツ（Dr.K.Florenz、ドイツ人、1865-1939）から多くの言語学の知識を学びました。高砂族諸言語を研究する比較言語学的手法はドイツ人の東洋学者ガベレンツ（H.C.von der Gabelentz）を範としたものです。そして、人類学者との提携で言語研究の新しい方向を模索しようとし、さらに言語学を通して人間種族の相互の関係、人間の起源や歴史などを解明することに大きな関心を示しました。台湾語について大きな業績（『日台大辞典』（1907）と『台日大辞典』（上：1931年出版、下：1932年出版）など）を持っている小川ですが、台湾語よりむしろ高砂族諸言語に対する研究関心が高かったと捉えられます。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

予定「小川尚義の言語学とその時代」・林初梅・日本台湾学会第13回大会・2011年5月28日、29日、早稲田大学（目下は審査結果待ち）

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）